

# 引用の作法について

作成日：2014/08/20

高橋祥吾

## はじめに

レポートや卒論を作成するには、正しい引用を行う必要があります。しかしながら、多くの学生さんは引用の方法を軽んじる傾向にあるようです。残念なことに、論文の書き方の本を読んで勉強して欲しいと言っても読んでくれませんし、一年生の初年次セミナーできっと教わったと思うのですが、生かせていないようです（どこの大学でもある話です）。引用の方法は、形式の問題であり、書き方、体裁の問題であると思われるかもしれません。ひょっとすると、そう思うことが、引用を軽んじる原因なのでしょうか。

しかしながら、適切な引用ができるということは、自分の意見と、他人の意見（研究）を明確に区別できている証拠でもあるのです。他人の文章に影響されすぎて自分の意見を見失ってしまった人にも、逆に自分の意見しか持たずに他人の意見に耳を貸さない人にも、適切な引用はできません。適切な引用は、レポートの質に影響するのです。

そのようなわけで、引用の方法について書いてみました。長くなりましたが、是非とも読んで下さい<sup>1</sup>。

## 引用の仕方／引用の種類

引用の仕方には、大きくわけてA)直接引用と、B)間接引用とがあります。B)間接引用は自分の言葉で書き直した（要約した）引用のことです。どちらも出典を明示する必要がありますし、それぞれ引用のルールがあります。

### (A) 直接引用

直接引用というのは、参考文献に書かれている文章をそのまま抜き書きしたものです。直接引用には二種類あり、1)筆者自身の文の中で鉤括弧に入れて引用する場合（短い引用）と、2)段落を変えてある程度まとまった量の引用を行う場合（段落引用）です。

#### 1)短い引用

一行から二行程度の短い文を引用する場合は、引用する文を鉤括弧に入れて引用します。

#### 【例】

引用はどのような時に行うものなのだろうか。澤田は「説明や解釈を行うにあたって、自分のことではなく、資料そのものとして語らしめるほうが、読者の理解効果をあげるためにはるかに有効だという場合に用いる」ものだという(澤田 1977, 146)。

赤い文字の部分が引用で、青文字はその出典の明示になります。出典の明示についての説明はまた後で行います。鉤括弧のなかの引用部分は、一字一句変えることなく引用しましょう。もし、文の中に明らかな間違い（たとえば、漢字の間違い）があったとしてもそのまま引用します<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> この文書では、意図的に文字に色をつけています。基本的に見出し語に色をつけています。また、説明の都合上、色をつけた方がよいと判断した部分にも使っています。しかし、実際に授業の課題として書くレポートや卒論では、色を付けることは余程の理由がない限り控えるべきでしょう。

<sup>2</sup> 引用元の文章に漢字の間違いなどが合った場合、その語句の直後に（ママ）と付けます。「漢字の間違いがあることに気づいていますが、引用ですからそのままにしています」ということを伝えるためのものです。詳しくは戸田山先生の本を読んでみて下さい(戸田山 2002, 235-6)。

上記の例文の引用では、引用は「読者の理解効果を上げるために」行うということですが、「理解効果を上げる」と言っても様々な理由が考えられるでしょう<sup>3</sup>。たとえば、直接引用した方がわかりやすいと考える場合があるでしょう。また、強調の効果があると考えて引用することもあるでしょう。さらに、一読しただけでは意味がわからない難解な文章を引用して、その文章がそのような意義を持つのか、その文章を書いた人がどのような意図で書いたのか、それらをレポートで明らかにしようとする場合もあります。いろいろです。

## 2)段落引用

段落引用は、引用した部分の段落を自分自身の文章よりも、段を下げて書くことになります。このような段落引用は、引用する分量が多い場合（通常3行から5行以上引用するとき）に行います。たまた、一行であっても重要な引用であるために、強調などの理由で段落引用を行う場合もあります。

### 【例】

どうして引用の仕方が重要なのだろうか。引用をするときのルールを守る必要性について、酒井は次のように説明している。

引用文は他人からの借り物であり、借りる際のルールを順守する必要がある。ルールを破ると、他人が収集した情報を借りるのではなく盗んだことになり、盗用・剽窃となって著作権法を侵害することになる。（酒井 2009, 39）

このように酒井は、引用のルールを破ることは他人の情報を盗む行為になり、法律に違反するため、適切な引用をすることが重要だと考えているのである。

赤い文字にしてある部分が、他の著作に書いてある文章をそのまま書き写したのになります。青文字は出典を明示したものです。この段落引用のときには鉤括弧は不要です。

## (B)間接引用

参照した文献に関する記述をすべて直接引用で済ませるわけにはいきません。そこで、読んだ本（その一部）の内容を、まとめて（要約して）自分の言葉で記述する必要があります。この「要約して自分の言葉で書く」<sup>4</sup>という作業は、実は非常に難しいです。まず正しく本の内容を理解しないといけませんし、自分のレポートに使えるようにまとめて、記述する必要があります。内容を正確に理解して適切にまとめて引用するには、かなりの訓練が必要です。

ともあれ、間接引用は要約して記述することに加えて、当然出典の明示が必要です。たとえば次のような文章になります。

### 【例】

なぜ引用の方法について、先生はこんなにも小うるさく重要性を強調するのだろうか。その理由は、酒井によれば不適切な引用は、著作権を侵害するからというものであった(酒井 2009, 39)。しかし、他にも引用や出典の明示が重要な理由が存在する。

<sup>3</sup> この文で「理解効果を上げる」などに鉤括弧を使っているのも引用と言えます。この文で出典を明示していないのは、すでに上記の例文で出典を明示していて文脈上出典が明白だからです。

<sup>4</sup> この鉤括弧の使い方は、「引用」ではなく「強調」です。

戸田山の考えでは、論文ではオリジナリティを示すことになるが、そのオリジナリティは他人の業績によって可能になる。そこで、オリジナリティを可能にした他人の業績のどこに依拠しているのかを示すため、そしてその他人の業績への敬意を示すために引用のルールや出典の明示が必要であると、彼は説明している(戸田山 2002, 232-3)。

その一方で山内は、論文の客観的に評価するために出典の明示が重要であると説明する。論文は、論文の材料、手順、背景などの「手の内」を明示することによって「説得力」を持つ。出典の明示はその「手の内」を明かすことであり、他の人が検証したり吟味したりできるようにすることである。そのような「手の内」を明かさないう論文は、卑怯であり、弱虫であると、山内は言う(山内 2001, 156-8)。

以上のような見解をまとめると引用のルールを守ることや出典を明示することは、1)他人の権利(著作権)を侵害しないために、2)他人の業績へ敬意を示すために、3)他人の業績(研究)に依拠していることを明示して、客観的に検証・評価をしてもらうために大切だということになる。

上記の例文では、三箇所の間接引用があります。最初の酒井先生の本からの間接引用は、段落引用の例文の引用を簡潔にまとめたものです。戸田山先生と山内先生の本からの間接引用は、酒井先生のものより、少し長いです。

「酒井によれば」とか「戸田山は、……と説明している」のような表現を入れることで間接引用であることがよりわかりやすくなります。是非入れましょう。

間接引用したら、間接引用の部分だけでひとつのパラグラフにした方がよいと思います。少なくとも、自分の意見の部分と混ぜないようにしましょう。そのためにパラグラフを分けるといいと思います。間接引用の量が多すぎる場合は、節で分けるといいと思います。

自分の意見と他人の意見が混ざってごちゃごちゃしているということは、実は理解ができていない証拠だと思います。上記のように、戸田山先生の意見でパラグラフをひとつ作り、山内先生の意見でもうひとつパラグラフを作る、そして、また新しいパラグラフで自分の意見を書くのがよいでしょう。

## 出典の明示／引用の形式

さて、直接であれ、間接であれ、引用の基本は以上の通りです。しかし、引用の仕方を学んだだけでは不足です。その引用の出典を明示する必要があります。そして、出典を明示しないと剽窃だと見なされてしまいます。

それでは、「出典を明示する」とはどういうことでしょうか。レポートや論文の最後に参照した本を一覧にして掲載するだけでは、不十分です。引用した箇所にも、出典を書かなければなりません。レポートの最後に一覧表を載せるだけでは、それらの文献は、レポートのどの部分を記述するために参照した(読んだ)のかわかりません。考え方を変えると、文献表に書誌を挙げていてレポートに反映させていないのなら、読んでもその本の内容を理解できていないか、実は読んでいないかのどちらかではないかと疑わざるをえないです。

そういうわけで出典の明示の仕方を知り、その形式を守りましょう。出典の明示までできてはじめて「引用」を正しく行ったことになります。

しかし、一言で引用の形式と言っても、人によって使用する形式の細部が異なっていることが多いです。和書と洋書で異なることもあります<sup>5</sup>。とはいえ、大体共通している部分がありますから、そこだけは間違えないようにしましょう。

今回は、和書の文献の記載のやり方の基本を紹介します。今回の文献の書き方は、シカゴ・スタイルに準拠しています。

<sup>5</sup> 縦書きの場合、欧文の文献と、邦語の文献の書き方がずいぶん違います。戸田山先生の本に詳しく書かれています。(戸田山 2002, 239-240)。

重要なこと：レポートの最後に文献表をつけることは大事です。しかし、その文献をレポートのどの部分を書くために参照したのか、そこを明示することも大切です。というか、明示しないとダメです。

文献を明示する方法には二種類あります。

1. 注で出典を挙げ、さらに注で挙げたすべての出典を、論文の最後の一覧表として列挙する「**注記式参考文献目録方式**」
2. 出典を参照した文章の末尾で、括弧付きで著者、出版年、ページ数を書き、論文の最後でそれらの参照したすべての出典を一覧表として列挙する。「**参照リスト方式**」<sup>6</sup>

高橋はいつも2の方法で論文を書いています。自分が読んだ論文の多くが、この方式で書かれていたので、まねしたらそうになりました。これまでの例文もこの方式で出典を明示しています。

### 「注記式参考文献目録方式」<sup>7</sup>

引用部分に注番号を付け、その注で出典を明示する方法です。

#### 【例】

引用はどのような時に行うものなのだろうか。澤田は「**説明や解釈を行うにあたって、自分のことではなく、資料そのものとして語らしめるほうが、読者の理解効果をあげるためにはるかに有効だという場合に用いる**」<sup>1</sup>ものだと言う。

<sup>1</sup> 澤田昭夫、『論文の書き方』, (講談社, 1977), 146.

#### 【例】

どうして引用の仕方が重要なのだろうか。引用をするときのルールを守る必要性について、酒井は次のように説明している。

引用文は他人からの借り物であり、借りる際のルールを順守する必要がある。ルールを破ると、他人が収集した情報を借りるのではなく盗んだことになり、盗用・剽窃となって著作権法を侵害することになる。<sup>2</sup>

このように酒井は、引用のルールを破ることは他人の情報を盗む行為になり、法律に違反するため、適切な引用をすることが重要だと考えているのである。

<sup>2</sup> 酒井浩二、『論理性を鍛えるレポートの書き方』, (ナカニシヤ出版, 2009), 39.

この方式では、引用の最後に注をつけます。Wordの脚注機能でつけるとよいでしょう。そして、注の内容として引用の出典を挙げます。

<sup>6</sup> 「注記式参考文献目録方式」と「参照リスト方式」は、トゥラビアン(2012)に基づいています。

<sup>7</sup> この「注記式参考文献目録方式」の書き方は、トゥラビアン(2012, 195; 202-6)に基づいています。

出典の書誌情報として必須の項目は、著者名、書名、出版社、出版年、ページ数です。しかし、文献の種類によって必須項目が変わります。詳しくは後で述べます。

すでに挙げた書誌をもう一度挙げる時は、注に書く情報を一部省略できます。具体的には次のようになります。

**【例】**

<sup>3</sup> 酒井, 『論理性を鍛えるレポートの書き方』, 41-52.

このように、著者名（苗字のみ）、書名、ページ数だけで大丈夫です。

以上のように、間接、直接を問わず引用のたびに注で出典を明示します。そしてレポートの最後に注で挙げたすべての文献の一覧表を書きます。

**【例】**

**文献**

酒井浩二. 『論理性を鍛えるレポートの書き方』. ナカニシヤ出版, 2009.

澤田昭夫. 『論文の書き方』. 講談社学術文庫. 講談社, 1977.

ここでは、ふたつしかありませんが、さまざまな文献から引用するほどリストは増えていくことになります。注では、出版社と出版年が括弧に入れられていましたが、文献一覧では括弧はなくなり、ページ数の表記がなくなります<sup>8</sup>。（「講談社学術文庫」の項目は必須項目ではありません）

**【ページ数の表記について】**

これまでの説明では、ページ数は数字のみで表記しています。しかし、そうしない場合がありますので、その説明をしておきます。間違っている例と正しい例を挙げてみます。

〈間違い〉

P50 50P P.5-10 p. 10-13 10-13P p20

〈正しい〉

- p. 50
- pp. 10-13
- pp. 125-34

**ポイント**

p. は小文字で必ずピリオドをつける。ピリオドの後に半角スペースをいれてからページ数を書く。引用ページが複数にわたる場合は、pp. にする。

<sup>8</sup> しかし、本によっては括弧を残したままで一覧表を作成している場合があります。

## 「参照リスト方式」

参照リスト方式は、注で文献を挙げるのではなく、引用文の直後に括弧のなかに、著者名、発行年、ページ数を書き、論文やレポートの最後に引用した文献の一覧を列挙する方法です。

### 【例】

どうして引用の仕方が重要なのだろうか。引用をするときのルールを守る必要性について、酒井は次のように説明している。

引用文は他人からの借り物であり、借りる際のルールを順守する必要がある。ルールを破ると、他人が収集した情報を借りるのではなく盗んだことになり、盗用・剽窃となって著作権法を侵害することになる。（酒井 2009, 39）

このように、酒井は引用のルールを破ることは他人の情報を盗む行為になり、法律に違反すると説明している。

青文字になっている部分のように書いて出典を明示します。これまでの引用の例文ではすべてこの参照リスト方式で出典を明示しています。

### 括弧での参照のパターン

（酒井 2009, 39）のような表記方法を紹介しましたが、書く人によってこの表記法にも細かな違いが出てきます。

（酒井 2009: 39）

（酒井 2009: p. 39）

（酒井 (2009), p. 39）

括弧やコンマの使い方に細かな違いが出ているだけです。いずれのバージョンも著者、出版年、ページ数をしっかり表示しています。そこが重要です。

論文やレポートの最後に、引用した出典の書誌情報を一覧にしてすべて列挙します。

### 【例】

#### 文献

酒井浩二. 2009. 『論理性を鍛えるレポートの書き方』. ナカニシヤ出版.

澤田昭夫. 1977. 『論文の書き方』. 講談社学術文庫. 講談社.

戸田山和久. 2002. 『論文の教室: レポートから卒論まで』. NHKブックス. 日本出版放送協会.

山内志朗. 2001. 『ぎりぎり合格への論文マニュアル』. 平凡社新書. 平凡社.

「注記式参考文献目録方式」の一覧表と違って、出版年の順番が著者名のすぐ後になっています。その他は変わりません。記述すべき書誌情報は同じです。記述すべき内容を記述しないことが一番問題です。またある程度、項目の記述の順番が決まっています。この順番を守らないのもダメです。<sup>9</sup>

それでは次に、レポートの最後の一覧表をつくるためのさまざまな事柄を確認しましょう。

## 参考文献一覧表を作成する

一覧表を作成するとき、文献の種類によって記載する事項が異なります。ここでは、「参照リスト方式」に基づいた一覧表の表記を紹介します(トゥラビアン 2012, 307-309)。

### 単著(Single Author or Editor)の場合

単著とは、ひとりの人が書いた一冊の本のことです。編者がひとりの場合もここで紹介します。

#### 【例】

鬼頭秀一. 1996. 『自然保護を問いなおす』. ちくま新書. 筑摩書房.  
重田園江. 2013. 『社会契約論：ホッブズ、ヒューム、ルソー、ロールズ』. 筑摩書房.  
市野川容考 (編). 2002. 『生命倫理とは何か』. 平凡社.  
在間進. 2006. 『詳解ドイツ語文法』. 改訂版. 大修館書店.

- ・ 著者名 (編者名) , 発行年, 書名, 出版社の順番で記載します。
- ・ 編者を挙げる場合は, (編) を名前の後に付けます。
- ・ 書名は二重鉤括弧(『』)でくくりましょう。普通の鉤括弧(「」)は, (雑誌) 論文に使います。
- ・ 新書のレーベル名を入れてますが, 絶対必要というわけではないです。上記のふたつの例の書籍 (鬼頭先生と重田先生の本) は, どちらもちくま新書です。上記のように片方の文献に「ちくま新書」と入れて, もう一方の文献には入れないのは, 悪い例です。入れるなら, どちらにも入れなければなりません。入れないなら, どちらにも入れないようにします。文献一覧表のなかで, 書き方を統一しなければなりません。
- ・ 第二版以降の場合は, 書名の後に「第二版」などの版を書き加えます。例のように「第二版」の代わりに「改訂版」となっている場合もあります。出版年は改訂された版の年を書くことになります。

### 共著の場合

共著とは単著に対して複数の人で共同執筆した本のことです。

#### 【例】

杉本泰治・高城重厚. 2008. 『大学講義 技術者の倫理入門』. 第四版. 丸善.  
水地宗明・山口義久・堀江聡(共編). 2014. 『新プラトン主義を学ぶ人のために』. 世界思想社.

- ・ 著者 (編者) をつなげる時には「・」を使います(戸田山 2002, 240.).
- ・ その他は単著と同じになります。

<sup>9</sup> ここで、最後の文献一覧を「参照リスト方式」で書きながら、引用で「注記式参考文献目録方式」に準じて注で文献情報やページ数を書いたりするのは、ほんとうは間違いですが、しかし致命的ではないミスです。ページ数を入れていなかったり、必須の項目を書き忘れての方が問題です。

## 翻訳本の場合

### 【例】

トムソン, A. 2012. 『倫理のブラッシュアップ: 実践クリティカル・リーズニング応用編』. 斎藤浩文・小口裕史 (共訳). 春秋社.

クヴァンテ, M. 2013. 『人格: 応用倫理学の基礎概念』. 後藤弘志(訳). 知泉書館.

- ・最初に来るのは、原著者の名前になります。書名の後に翻訳者の名前を書き、翻訳者の名前には（訳）と付けます（訳者が複数のときは（共訳）と付けましょう）。
- ・最初にある、原著者はLast Name, First Nameの順で書くのが通常です。そこで、上記の例では「クヴァンテ, M.」のようにしています。しかし実際には、本によって「M・クヴァンテ」となっていたり、「ミヒヤエル・クヴァンテ」となっていたりします。つまり、下記のように書かれることも多いです。

A・トムソン. 2012. 『倫理のブラッシュアップ: 実践クリティカル・リーズニング応用編』. 斎藤浩文・小口裕史 (共訳). 春秋社.

M・クヴァンテ. 2013. 『人格: 応用倫理学の基礎概念』. 後藤弘志(訳). 知泉書館.

どちらの書き方が正しいとは言えないですが、私としては「クヴァンテ, M.」のように書く方が好きですが、「M・クヴァンテ」の書き方を採用している人の方が多い気がします。いずれにせよ、この二種類の書き方を混ぜてはいけません。

## 本（論文集）の一章（一部）を挙げる場合

編者がいる本は、いろいろな人が執筆したものを集めて一冊にまとめたものです。一冊の本なのですが、章ごと、項目ごとに執筆者が違う本です。本によっては論文集と言ったりします。このような本の全体を挙げるときは、すでに挙げた単著の場合に準じます。しかし、その本の一部分だけを挙げるときは、次のようにします。

### 【例】

中畑正志. 2008. 「アリストテレス」. 内山勝利(編) 『哲学の歴史1』 所収, 517-639. 中央公論新社.

玉井真理子. 2002. 「出生前診断」. 市野川容考 (編) 『生命倫理とは何か』 所収, 80-85. 平凡社.

- ・執筆者名、発行年、章タイトル（項目タイトル）、編者名、書名、ページ数<sup>10</sup>、出版社の順番で記述します。しかし、実際によくみる順番は、執筆者名、発行年、章タイトル（項目タイトル）、編者名、書名、出版社、ページ数、です。わたしもこの順番にしています。この場合は以下ようになります。

中畑正志. 2008. 「アリストテレス」. 内山勝利(編) 『哲学の歴史1』. 中央公論新社. 517-639.

- ・章のタイトルは鉤括弧で囲みます。二重鉤括弧ではありません。
- ・書名に「所収」と付けていますが、必須ではありません。

<sup>10</sup> 山内はページ数をオプションとしていますが、必須項目と考えた方がよいです(山内 2001, 158).

## 雑誌論文の場合

雑誌論文はほとんどの場合、大学や学会が発行している雑誌に掲載されている論文です。出版社から発行されていないため一般の本屋に流通していません。

しかし、近年ではネット上にPDFファイルの形式で公開されることが多くなってきました。Googleで検索して行き当たるPDFファイルには、このような雑誌論文であることがあります。このときPDFファイルは、ネットからの引用ではなく雑誌論文として扱い、文献表の記述も下記の書き方に準じます。

### 【例】

赤井清晃. 1999. 「ペイラ(吟味)とエレンコス(論駁)—アリストテレスにおけるディアレクティケーの問題—」. 『ヘーゲル學報』 4: 85-110.

藤井康博. 2008. 「動物保護のドイツ憲法前史(1)」. 『早稲田法学会誌』 59, 1号: 397-453.

北郷彩. 2007. 「アリストテレスにおける範疇の基礎としてのプレディカビア」. 『哲学』(北海道大学哲学会) 43: 1-19.

日吉大輔. 2008. 「定義はどのようにして構成されるか—アリストテレス『分析論後書』第二巻第十章におけるホロスとホリスモスの区別—」. 『哲学』(日本哲学会)59: 277-292.

高橋祥吾. 2007. 「ポルピュリオス『エイサゴゲー』における固有性について」. 『哲学』(広島哲学会) 59: 1-13.

- ・ 順番は、著者名、発行年、論文タイトル、雑誌名、巻数、号数、ページ数の順番です。
- ・ 号数はそもそも存在しない雑誌もあります。存在しない場合はもちろん不要です。
- ・ 雑誌名と巻号数は、「『早稲田法学会誌』第59巻第1号」としても良いでしょう。
- ・ 論文タイトルは、鉤括弧に入れます。二重鉤括弧は雑誌名に使います。
- ・ 上記の例は、少し特殊な例を挙げています。雑誌論文の場合、出版社を明記する必要はないのですが、哲学・倫理学の雑誌論文には、なんと『哲学』という名前の雑誌がたくさんあります。基本ルールとしては、『哲学』と記載するだけで十分なのですが、ここではあえて書名のあとに括弧に入れて出版している学会(研究会)名を入れています。わかりやすくする配慮です。

## ウェブサイトの場合

レポートの引用文献として、ウェブサイトはあまり好まれません。理由はいくつか考えられます。

- ・ 剽窃の原因となっていると思われる。コピペレポートを誘発と思われるわけです。
- ・ 全体として質が悪い。著名人の文章でもブログ記事はいい加減ということもありえます。玉石混交で、玉が著しく少ないようです。
- ・ ネットで得られる内容は、レポートに関しては多くの場合、他の媒体(つまり本)から、同じかそれ以上の情報を得ることができでしょう。

このような次第で、あまりレポートでの引用の出典として好まれません。

とはいえ、便利なことは確かです。私は、政府や企業、病院や学会のサイトで公表されている情報は、引用に値する場合が十分にあると考えます。結局は、引用する人の力量に左右されるということでしょう。さて以下に、例を挙げていきます。

### 【例】

池田信夫. 2010. 「ロールズの正義論」. 『池田信夫 blog』. 2010年10月10日14:06. 最終アクセス2014年8月12日. <http://ikedanobuo.livedoor.biz/archives/51488697.html>

また引用する時には、引用した文章の後に

(池田 2010)

と書けばよいでしょう。その他には次のようになるでしょう。

**【例】**

『日本経済新聞』（電子版）. 2014. 「新出生前診断 染色体異常、確定者の97%が中絶 開始後1年間、病院グループ集計」. 2014年6月27日 20:49. 最終アクセス2014年8月12日. [http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2703S\\_X20C14A6CC1000/](http://www.nikkei.com/article/DGXNASDG2703S_X20C14A6CC1000/)

日本生理学会. 2009. 「動物実験について」. 2009年6月20日 10:37. 最終アクセス2014年8月12日. [http://physiology.jp/exec/page/doubutsu\\_jikken/](http://physiology.jp/exec/page/doubutsu_jikken/)

必要な要素は、ウェブサイトの運営者（ブログの作者名）、更新年、記事名、（あれば）ブログ名やサイト名、更新日時、最終アクセス日、URL、となります。

URLだけを載せるとか、最終アクセスや更新日時を書かないというようなことはしてはいけません。

**ウィキペディアについて**

ウィキペディアについて言えば、英語版の質は高いかもしれませんが、というのも、編集に関わる人口が圧倒的に多いからです。しかし日本語版は、編集に関わっている人の絶対数が少なく、出典などに問題を抱えていたり、英語版をいい加減に訳しただけの粗悪なものだったりすることがあり、決して質が高いとは言えません。そのため多くの先生はウィキペディアからの引用を禁止しているのです。

ともあれ、ウィキペディアの引用について考えていきましょう。

**【例】**

「動物の権利」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』. 2014年5月26日 (月) 02:20 UTC, URL: <http://ja.wikipedia.org/wiki/動物の権利>.

「Wikipedia:ウィキペディアを引用する」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』. 2013年3月10日 (日) 23:37 UTC, URL:<http://ja.wikipedia.org/wiki/Wikipedia:ウィキペディアを引用する>.

この書き方は、上記の「Wikipedia:ウィキペディアを引用する」にある文献の引用スタイルの提案の一例にしたがったものです。

この書き方は、「注記式参考文献目録方式」では問題ないかもしれませんが、「参照リスト方式」では少々困ります。引用時の出典の明示を行う時、括弧内に記述すべき著者名が不明だからです。例えば次のようにすると良いかもしれません。

**【例】**

(『ウィキペディア日本語版』 2013)

(『ウィキペディア日本語版』 「動物の権利」 2013)

(『ウィキペディア日本語版』 2013, 「現代の運動の歴史」以下)

(『ウィキペディア日本語版』 「動物の権利」 2013, 「現代の運動の歴史」以下)

「『ウィキペディア日本語版』」とだけ書くのではわかりづらいことを考えると、直後に「項目（記事）名」を書くのも一つの手段かもしれません（これは高橋独自の提案です）。また、ページ数の代わりに記事の節タイトルを書いて、ページ数の代わりにするのもよいでしょう(トゥビアラン 2012, 344)。

トゥラビアン<sup>11</sup>の提案する形式（シカゴ・スタイル）に従うと(Turabian 2013, chap. 19. 7. 1.“Websites”), ウィキペディアの一覧表での記述の仕方は、以下のようになります<sup>11</sup>。

『ウィキペディア日本語版』. 2014. 「動物の権利」. 最終更新 2014年5月26日 (月) 02:20 UTC. 最終アクセス 2014年8月12日.

このように著者名の変わりに『ウィキペディア』という書名を持ってきています。

以上、ウィキペディアについて、いろいろと書いていきました。正直なところ、こんな面倒な引用の方法を必要とするウィキペディアを利用するくらいなら、紙の本から引用した方がいいと思いました。

### 細かい注意点

今回紹介した引用の方法は、唯一のものではないです。先生によって、微妙に細部がことなることでしょう。というのは、引用の方法は時とともに少しずつ変化しているからです。分かりやすい所では、ウェブサイトからの引用やKindleのような電子書籍からの引用は、昔は当然ありませんでした。ウェブからの引用方法は、今回紹介した方法から、今後変わっていくかもしれません。しかし、記載しておくべき文献情報はおそらく変わらないと思います。

また、この文書では、ずっとコンマとピリオドを使用していました。しかし、日本語では句読点（、と。）を使うのが普通かもしれません。また、文献表でピリオドを使わない書き方をする人もいます。例えば、次のようにです。

市野川容考（編） 2002 『生命倫理とは何か』 平凡社。  
市野川容考（編）, 2002, 『生命倫理とは何か』, 平凡社。

これらの書き方が「間違い」とはいえません。文献情報として記述すべき内容は間違いなく記述しているからです。ただ、ピリオドの代わりにコンマを使ったり、ピリオドもコンマも使っていないだけです。従っている引用の流儀が少し違うだけなのです。

そのようなわけですので、卒論や他の授業のレポートを作成するときは、担当の先生の指示に従うのがとても重要です。

### おわりに

以上になります。こうやってマニュアルにするとかなりの分量になりますが、慣れるとそこまででもありません。実際にレポートを作成しながら覚えていけばよいのです。

また、今回はあえて日本語の文献のみの紹介にとどめました。欧米の言語に関する引用のスタイルの方は、ぜひ自分で調べて下さい。基本的には今回紹介したものと同じというか、むしろ逆で、シカゴスタイルというシカゴ大学出版局で利用されている論文のスタイルを参考にして、そのスタイルを日本語文献に適用させて、この文章を書きました。

<sup>11</sup> トゥラビアン(2013)の挙げている実際の例は以下のものです。

ともあれ、皆様がよいレポートや卒論が書けることを祈っています。

2014. 8. 12. 高橋祥吾

以下は、よろしくない文献の書き方の実例とどこが問題なのかを指摘したものです。

#### 悪い例1

「異議あり!生命・環境倫理学」 著者 岡本裕一郎 発行年2002  
出版社 ナカニシヤ出版

鉤括弧(「」)を使ってはダメです。書名は二重鉤括弧(『』)でくくりましょう。普通の鉤括弧(「」)は、(雑誌)論文に使います。

「著者」「発行年」などの見出しもどきは、不要

「出版社」の部分は不要。あと、改行してから、後ろの方に位置をずらしているが、これも不要。

#### 悪い例2

岡本裕一郎著、『異議あり!生命・環境倫理学』, 2002年 ナカニシヤ出版

「著」や「年」は不要。

出版年の位置がおかしいです。

#### 悪い例3

「ワイルドライフ・マネジメント入門」三浦慎悟 岩波書店 2008年6月17日発行

項目の記述の順番が違う。

書名を二重鉤括弧にいれていない。

発行の年月日のうち、月日は不要です。

#### 悪い例4

「動物保護のドイツ憲法前史」藤井康博

[https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/32341/1/WasedaHougakuK\\_aishi\\_59\\_01\\_Fujii.pdf](https://dspace.wul.waseda.ac.jp/dspace/bitstream/2065/32341/1/WasedaHougakuK_aishi_59_01_Fujii.pdf) (アクセス日 2014年7月24日)

実はネット上にあげられている雑誌論文なので、ネットの文献として扱うのではなく、雑誌論文として扱い記述の形式も雑誌論文の形式に準じなければならない。というわけで以下のようなになるはず。

藤井康博, 2008, 「動物保護のドイツ憲法前史(1)」, 『早稲田法学会誌』59, 1号, 397-453.

#### 悪い例5

Wikipedia 「動物の権利」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%95%E7%89%A9%E3%81%AE%E6%A8%A9%E5%88%A9>

ウィキペディアの文献の引用方法の提案にしがっていない。

アクセス日時がない。

アドレスの「<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8B%95%E7%89%A9%E3%81%AE%E6%A8%A9%E5%88%A9>」

はダメではないけど、「<http://ja.wikipedia.org/wiki/動物の権利>」の方があきらかにスマートだと思います。

例えば、こうなるでしょう。

「動物の権利」『フリー百科事典 ウィキペディア日本語版』. 2014年5月26日(月) 02:20 UTC, URL: [http://](http://ja.wikipedia.org/wiki/動物の権利)

[ja.wikipedia.org/wiki/動物の権利](http://ja.wikipedia.org/wiki/動物の権利)

#### 悪い例5

マイケル・トゥーリー, 「妊娠中絶と新生児殺し」, 神崎宣次(訳), 江口聡(編) 『妊娠中絶の生命 倫理 哲学者たちは何を議論したか』 所収

出版年と出版社とページ数がない。他はよいです。

文献表に載せる時は, 「マイケル・トゥーリー」ではなく, 「トゥーリー, M.」がベスト。逆に注では「マイケル・トゥーリー」がベスト。ただ, この区別をできてない先生も実際にはいるので, ここはあまり強く言えない。  
「所収」はつけない人もいます。

#### 悪い例6

コンラート・オット/マルチン・ゴルケ (編著) 『越境する環境倫理学—環境先進国ドイツの哲学的フロントニア』 株式会社 現代書館 2010年

「年」「株式会社」は不要です

「/」より, 「・」を使った方がよりよい。

他はよいです。

#### 悪い例7

「ロールズ 『正義論』とその批判者たち」

チャンドラン・クカサス、フィリップ・ペティット著

1996年初版 頸草(けいそう)書房発行

情報の順番がまずい。あと余計な改行しない。

書名には二重鉤括弧をつける。

訳者がない。

「年」「初版」「(けいそう)」「発行」は不要です。

## 文献

酒井浩二. 2009. 『論理性を鍛えるレポートの書き方』. ナカニシヤ出版.

澤田昭夫. 1977. 『論文の書き方』. 講談社学術文庫. 講談社.

戸田山和久. 2002. 『論文の教室: レポートから卒論まで』. NHKブックス. 日本出版放送協会.

トゥラビアン, K. L. 2012. 『シカゴ・スタイル 研究論文執筆マニュアル』. 沼口隆・沼口好雄(共訳). 慶応義塾大学出版会.

Turabian, K. L. 2013. *A Manual for Writer of Research Papers, Theses, and Dissertations: Chicago Style for Students and Researchers*. 8th ed. Chicago and London: The University of Chicago Press. Kindle.

山内志朗. 2001. 『ぎりぎり合格への論文マニュアル』. 平凡社新書. 平凡社.